

蠅螂の斧

次の一步

社会システムを変える

第2回

『対人援助学マガジン』の発行

団 士郎

なぜ、「次の一步」なのか。

仕事にはたくさんの人達が関わっている。誰が一番上手か、どれが一番効率的か等、気になる人も多いが実際はそんなことを競っているのではない。

あらゆる仕事には、それが成り立つ経過があり、現状という名の到達点がある。現状は決してないがしろにされるようなものではない。そこにたどり着くのに様々な試行錯誤、工夫や努力が重ねられているのが圧倒的である。

しかしここが最終到達点であるはずはなく、「現状」という名の課題含みの状態である。だから今を生きる者にとっての課題は、「次の一步」なのである。

今、私が身近に感じてきた業界(児童相談所)で、少なからず働く者が離職、退職する現実がある。現状の厳しさに身体的にも精神的にも音を上げて、撤退するのである。新しく参入した人達は本来、先ず現状の正しい理解を自分のものにし、その後、次の一步に踏み出すための思索を行う。これが進歩の道筋である。

ところがこれが起きずに、次々人が異動していったり、現任者が退職の道を選択するような事態に陥っている。こんな事では業界そのものが亡びてしまうだろう。

さらに、そういう現実を知った若い人達は、その業界を目指さなくなる。あるところでは、正規採用の公務員の募集に、応募がないという信じがたい事態が起きている。ここに、業態現状の毒性が社会に浸みだしてしまっているのを感じる。

実際は、各府県が同じ状況ではないのだから、改善の余地は限りなくあるのだが、世論という風評への迎合と、組織の自己防衛によって、人材の参入を妨げてしまっている。貧すりゃ鈍するの言葉通り、長時間かかって出現した事態を、速攻の浅知恵で片付けようなどと、経験の浅い使い捨て非正規専門職でしのごうとしたりする。

ここにあるのは根本的な不真面目、不誠実である。いくらスローガンとして子どもの権利を語ろうと、福祉を声高に叫ぼうと、手段化されたところに落ち着きのないものは皆、ポロが出て瓦解する。

簡単なことではない。だからこそ、遠回りだと言われようと、地道な取り組みを続けるしかない。肩書きは管理職だが、短期決算のつじつま合わせしかできない経営者が会社にとって害毒であるように、行政システムに、そんな管理職しか出てこないようでは、それこそポピュリズムの公務員バッシングに、何も反論できないことになってしまう。

「次の一步」の確認と着手こそが、次世代の為の未来を切り開く道づくりなのだと思っただが……。

第二回目の切り口は、この「対人援助学マガジン」である。第26号の現在を、社会システム変化への提案の一つとして解説してみる。

はじめに

対人援助学マガジンとは何モノなのか。その中味ではなく、形式が持つ意味を探る文章から書いてみる。

バックナンバーをいつでも読めるようにしてあるマガジンだから、創刊の思いについては、検索すれば読者はいつでも創刊号編集後記を読むことが出来る。

それ自体、初期の意図にあったことだから、2010年6月創刊を振り返りながら、「マガジン」によせた社会システム変化への思いを書いてみる。

以下、「赤文字」は創刊号編集後記から

学会スタート以前

2009年秋に発足した学会ですが、その前、二年余り、京都キャンパスプラザで月例の「対人援助学会準備会」を開催していました。

ここには毎月、ヒューマンサービス分野のいろいろな人にゲストスピーカーとして来ていただきました。そこで見えてきた地域社会のディテールの構築性をとても興味深く思っていました。マガジンでは、そこを更に掘り下げたものが生まれると良いと思っています。月例会も又、再開したいと準備中です。お楽しみに。

現在、この会合は年四回ペースで、マガジン執筆者でもある「千葉晃央」、「中島弘美」が世話人になって継続中である。

創刊

会員112名(2010/5/25現在)の小学会ではありますが、技術革新の恩恵を受けて、こんな形の雑誌が出せることになりました。まず連載を引き受けて下さり、締め切り日に原稿がいただいた執筆者の方々に感謝します。

ご覧の通り、様々なジャンルからの多彩(多才)な顔ぶれによる一冊に仕上がりました。まだまだ展開途上(完成形は全く考えていないので、ずっと展開途上誌です)ですので、学会員のみならず、読

んでくださった方々から、幅広く感想やご意見を伺いたいと思っています。

編集長メールアドレス

danufufu@osk.3web.ne.jp

また、新規連載参入の意思表示もお受けしたいと思います。編集者として採否判断はさせていただきますが、多領域から広く捉えた「対人援助学」の花が咲き乱れるといいと思っています。

季刊誌の位置づけです。創刊第二号は三ヶ月後、9月中旬発行予定です。したがって8月末が原稿締め切りになります。連載を開始された方々、心に留めておいてください。

創刊号は執筆者20名、全78頁のスタートだった。数頁のニュースレターのイメージからいきなり雑誌だったから、最初からなかなかのボリュームだったと思う。

それが現在7年目、2016年6月発行の通巻25号では、執筆者42名、全256頁に成長している。編集長としてはますます増ページの一途をたどれば良いと思っている。

ご承知の方も多いと思うが、この間、連載者による書籍刊行も複数生まれた。更に、対人援助学マガジンが舞台になって、いろいろな活動が花開いていっている。

それは連載を読んだ未知の読者の所から講演依頼やシンポジスト依頼がくるとか、連載記事を参考資料に指定して、講座の事前学習を求める。近接領域の研究者との交流が、新たに生まれる等である。

これらはいずれも、創刊時に意図したマガジンの役割である。偶然ではなく、こういう流れになっていくことを願って継続してきたのである。

プランド・ハプスタンスのことは中村正さんが連載で触れていた気がするが、私がマガジン創刊にこめた思いは全くそれである。

意図された準備と継続が、直線的因果として、何かをもたらすと考えているわけではない。むしろそれが、どんな幸運や出会いを誘ってくるかは決められない。しかし、必ず何か事前には予測できなかったモノがもたらされるに違いないのだ。

それは社会システムが常に流動、変化しているからである。私達の頭の中は、なかなか変

化しない。そこで立てるプランだから、当然のように硬直化するのである。動いているのは「社会」なのである。

マガジンへ

思いつきは瞬間でした。ニューズレター編集担当の千葉君と話している最中、最初に考えていた印刷物のNLから大きく展開してしまいました。そのことで負担は増えましたが、楽しみも増えました。この着想から考えはじめたら、話題の Free のことや、iPad がとてもしっくり来ました。

「Free」は文字通りタダと言うことである。クリス・アンダーソンの本が話題になった。無料であることでビジネスがどう成立するのかとか、どの業界にあらうと、「無料」との戦いは避けられないなど、刺激的な言葉が並んだ本だ。

「対人援助学マガジン」のコンセプトが、これにとても親和的なのが面白い。自分たちの着手したことが、世界の潮流と重なっていることに納得である。

でもこれは誰かが考え出した理論的なアイデアではなく、今の時代に整備されたインフラを駆使すれば当然、行き着くところである。

共時性(シンクロシティ)などということをよく言うが、この流れはインフラの整備状況と連動した必然であって、誰か固有のオリジナルアイデアではない。

事態が展開していくところに、さしたるオリジナリティがあるとは思わないが、そうなっていかないところには、頑固な現状維持への無意識の欲望がある。それこそ流動的システムではなく、事実をものともしない個人の頑迷な主張である。

社会のインフラは、あきれるほど日進月歩している。しかし現実の社会では、その手段が十分に生かしているとは思えない。道具は生かした使い方をしてこそその道具であって、道具愛が目的になってしまっているような人や話題には関心が持てない。

カラー写真も含む雑誌だというのは、総ページ数も印刷費も発送コストも考えなくていいのです。バックナンバーの在庫管理も、売れ行きも、収支決算も要らない刊行物になりました。

表紙のデザインや基本レイアウトのことを、あれこれ楽しみに考えているだけでした。校正が緩いかもかもしれないのはお許し下さい。まあ、素人ですから。

「学会誌」(本マガジンとは別です)を完全にWEB上の発行にしようと言っていた望月さん、サウさんの意図がやっと理解できました。

私は、学会誌、査読、論文掲載、業績という枠組みの面倒くささを避けていたい人間なので、そちらとは離れたところからエールを送ることにした。そして、このマガジンの発展が私の背負える学会のための、いやいや対人援助世界への貢献だと考えた。

ところで、世の中は、ますます短く、簡潔なものへの指向を強くしています。私の愛読誌「月刊クーリエ JAPON」も何度かのリニューアルを繰り返し、どんどん記事は短いコラム誌のように変身しています。

そんな中だからこそ、長く書かなければ伝わらないこともあるのだというマガジンにしたいと思いました。

専門的ではあるが、読者対象に排他的姿勢をとらない。どなたにも「今、私達の時代のヒューマンサービス世界では・・・」とお伝えできるもの満載になったのではないかと考えています。

雑誌(印刷物)として手にするのが馴染む方は、ご自身でプリントアウトして、ファイルしておいていただくと、雑誌らしさが出るかもしれません。(その場合、出来ればカラー印刷で)。

今後の課題は、会員を増やすための宣材として考えていたニューズレターの役割問題です。無料で誰でも読めるマガジンにしてしまったら、入会するメリットがないという意見。

私も長年そう思ってきましたが、ネット上の無料ソフト開発者のモチベーションの在り方のことを考えると、この思い込みはオールド世代のビジネスモデル発想かなと思うようになりました。

新しい学会を作った目的に見合う活動は何なのか。そこに向けてどう行動すべきなのかが問われています。

こんな事を書いている内にも時代はドンドン進み、今クーリエjaponは、完全 Web 雑誌になった。講談社という大手出版社の発行する、元は紙で刊行されていた月刊誌が、完全 Web 化される時代な

のである。

「調査報道」という言葉も時々聞く。取材をし、裏を取って、時間をかけた長文の記事に仕上がる。しかしそのようなモノを掲載する紙面、誌面はもはや紙媒体には残されていない。大衆は誰も読まないし、そんなモノが掲載された雑誌や新聞を購読しない。

その結果、短文のコラムのようなモノばかりが掲載される。「調査報道」はこれに対するジャーナリストの主張である。

近年目に付く、「この記事はデジタル版で」とかいうのは、そんな長文の掲載可能性が、そこにあるからだ。

分かりにくい現実や、巧妙に画策された悪事は、単純の露見することはない。隠蔽をかいくぐって真実に近づくジャーナリストの努力なしには、事実への接近すらあり得ない。

政府の発表や広報のデータを貰って、そのまま記事を書く記者など、書記以下だろう。調査報道はジャーナリズムに不可欠だが、取材費が出ない、コストに見合うインカムがないというので、簡単お手軽でキャッチーなゴシップが大衆版ニュース紙面を占める。

執筆者

雑誌の基本コンセプトが出来ると私の回りで、様々な対人援助世界で活動する人に、執筆を呼びかけてみたくなりました。

「出来るだけ自由に、何でもいから書いてください。ただし連載です。最低でも一年、できればそれ以上延々と。季刊発行ですので、年4回。最低でも2頁、出来ればもっと長く」、こう書きました。

長く書いて下さいということは、その方の世界の一部分がある程度の深さをもって提供されることを求めています。業界の専門用語や慣用概念で解説をして終了なんて原稿は登場する余地の少ないことになりました。

この要望に応えるものを書くためには、それなりのキャリアも必要かもしれません。でも、年配の人にしか書けないというものでもありません。いろんな年代の、いろんなジャンルの経験智が集まるといいと思っていました。

また、一分野から一本というコントロールをかけるのではなく、似通った実践が出てくるのも容認しようと思っています。細部に神宿るといいます。そんなディテールの差異こそが私たちが見るべきものなの

かもしれません。

もっとも冗長がすぎれば読み手はうんざりして離れてしまうだろう事も戒めに、筆者、編集者共に、この営みを開始します。（編集長 団士郎）

このあとがきを書いてから7年経った。自分への約束通り、遅れも欠番もなく7年目の今号、通巻26号が出せている。

私達はこの世界に居るために、なにがしかの使命を持って配置されている（と、私は思う）。今いる場所は偶然のようで、偶然ではない。そこに至る道程を振り返ると、必然が見えてくるに違いない。七十才に近づいたから言うことかもしれないが、それこそ私達が自分を生きてゆく意味だろうと思う。

自著が出るまで

「いま、人間として」

これは10号で休刊になった雑誌の名前だ。そしてこの雑誌を通じて私は、読者から書く側への道筋が切り開かれたと思っている。

漫画は小学校高学年から描いていて、大学4年の時、ひよんなことから産経新聞で一コマ漫画の連載が開始した。しかし文章を書こうと思ったことはなかった。

読書は随分遅くに身についた習慣で、好きになってはいたが、文章が書きたいとも、書けるとも思ったことはなかった。児童、生徒時代を振り返っても、作文が得意であったとか、読書感想文が優れていたなどという記憶はない。むしろ、「女子は何であんないろいろなことを考えるんだ？」と作文のたびに思っていた。

読書傾向として、漫画家目線の影響かジャーナリストティックなものは好みだった。筑摩書房刊「終末から」は書店で、印象的な味戸ミトが描くイラストの表紙を眺めるくらいで、好みの範疇から少しはずれていた。1973年に創刊され隔月官で9号、1974年10月に終巻を迎えた。大衆雑誌ではない。読者層は明らかにあの頃のインテリ層だった。

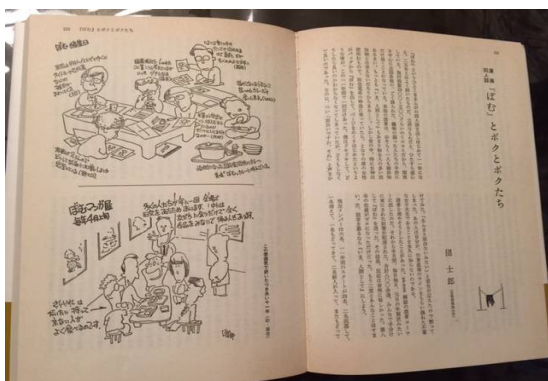
この編集長をしていたのが原田奈翁雄という人で、私は知らなかったが業界では有名な人らしい。

その人が筑摩書房を退職して立ちあげた出版社が径(こみち)書房。そこから刊行された季刊誌が「いま、人間として」である。創刊号の前に、準備号が刊行され、京都府福知山市に住んで、舞鶴市まで通勤していた私は、書店で見つて購入していた。

当時そんな動機が高まっていたこともあって、愛読者カードに漫画と文章を絡ませた感想を送っていた。これはずっと愛読していた月刊「話の特集」誌にも同様で、手書き文字、漫画付きの愛読者カードは、そのまま読者欄に載った。

そんなある日、径書房編集部からの封書を受け取った。それは編集長から、第二号で特集するテーマ「つきあい」に寄稿してくれないかというものだった。驚き、喜び、そして不安が同時に起きた。既に漫画家としては原稿料も貰っていたが、文章でその経験はない。

そんな不安を支えてくれたのは、漫画だった。大きくイラストを添えて、仲間内のことを描けばよいと思うことにした。



業務レポート

児童相談所で心理職として働いている頃、自分たちの仕事を世の中に報告することも、仕事の一つだと思っていた。一般にはプライバシー保護の意見が大勢を占めていたが、私はそういう言い草は怠け者に属することだと思っていた。給料を貰って仕事をしていながら、その結果、効果について、誰からも吟味されない仕事など発展するはずがないと思っていた。

無論、冊子を作ったりするのが好きだったこともある。しかし、それを個人的楽しみにするつもりは余りなかった。漫画家であったことも影響しているかもしれないが、文学(文藝)志向はなかった。文字にするのはもっぱら、仕事の中味、現状であった。

それは最初、職場レポートとして形になった。毎年一冊、児相レポートを発行し始めたのは1980年代のことだった。既に他児相でも研究紀要や事例集は発行されていた。厚生省(当時)も全国の児相に募って「事例集」を発行していた。京都府からも何度か執筆した。しかしそこに共通した執筆者の偏りがあるのが気になって仕方なかった。



当時、心理職は公務員の中ではやや専門家気取りなところがあって、その人達が論文紛いの執筆をしている印象が拭えなかった。当然、一般行政職から児童福祉司になっている人達はなかなか手を出さなかった。

私はそういうやり方をよしとは思わなかったので、児童相談現場の一年間のレポートとして、全員執筆に拘って出しつづけた。



四人囃子

こういう動きとは別に、京都府北部の二カ所の児相で働いていた中年男性4人で、もっと自由に何でも書けるミニコミを出して遊んでいた。それが「四人囃子」。結構な号数を重ねた。まだゼロックスは高いから青焼きコピーで、という時代だった。

今の人からみたら、児相が気楽な良い時代だったのだと思うに違いない。確かに結果はそうだった。そしてそこに仕事の厚味も人材も生まれた。

現状の大変さが、何を生み出し、誰を助けることが出来ているのか。ここは考えどころだと思う。



心理テストカンファレンス

月に一度、京都府の心理職全員が出張で集まって合同カンファレンスを開いていた。その成果をまとめる必要を唱えて、心理職従事者向け

の「心理テストカンファレンス」を発行した。そこで出た意見や検討経過をまとめて、10頁程の冊子にまとめた。

これは事例提供者順で月刊発行にした。出来上がったものには、ローデーターも含まれていたのので、関係者、研究者、諸先輩だけに通しナンバーを入れて郵送した。

業界の著名な先生方、大学関係者から礼状や、お褒めの言葉、カンパをいただいたりもした。

家族の居心地

これはミネルヴァ書房から出た、私（達）にとっての最初の本のシリーズタイトルだ。背表紙を見てもらいたい。5人の執筆者の名前が狭いところにひしめいている。こういう表示にして欲しいと言ったとき、編集者は「字が小さくなって見づらいし、ゴチャゴチャする」と反対した。

しかし私は最初から、本を棚に入れた時に読めるところに5人の名前が必須だと主張した。それが職場の同僚と本を出す目的だったからだ。そしてそのように造本して貰った。



それから三十年経って、今、amazon

で検索して貰うとそれぞれの沢山の著書が登場する。でも、背表紙にクレジットされたのは、みんなこれが初めてだった。

将来、どうなるかは分からないが、そうなればいいなと思って、その時できる一歩を踏み出しておく私のスタイルの原点がここにある。そしてそれぞれの本が今、複数冊、刊行されて書店に並んでいる。

この本の刊行年1991年に京都府児童相談所の心理職だった背表紙の5人は2016年、以下のような肩書きでこの世界に居る。

川崎二三彦

子どもの虹研修センター理事長

早樫一男

同志社大学教授をへて、児童養護施設「大和の家」施設長

川畑隆

京都学園大学教授

柴田長生

京都文教大学教授

団士郎

立命館大学大学院教授

こんな結果になった理由の一部が、この背表紙だと思うのだ。私はそういう考え方をし、今日まで様々なことと関わってきた。この関わり方が社会システムへの小さな介入だと信じて。

*

この後、私は季刊「発達」（ミネルヴァ書房）において、十数年の長きにわたって「家族パスワード」と題する、家族心理臨床系の4頁の連載を行うことになる。

そしてそれをまとめたものが二冊の文春新書「不登校の解法」「家族力×相談力」になって刊行された。残念ながら今では二冊とも絶版だが。

そもそも

そもそも公務員5人組が最初に、ミネルヴァ書房から本を出すことになったのには、こんな経緯がある。季刊「発達」の特集原稿が何かの事情で落ちてしまったらしい。

京都の重症発達障害児研究会で面識のあった編集者 寺内一郎さんからピンチヒッターに急遽依頼され、特集「児童虐待」を、児相心理職6人で分担執筆することにした。

当時の児相心理職仲間はみんな熱心だった。私が煽った部分があるかもしれないが、よく学び、あちこちに顔を出して、発言も発信もしていた。そのメンバーで相当なボリュームの原稿を書き上げて季刊「発達」に掲載された。

その展開がシリーズ「家族の居心地」と題した、児童相談所における家族療法の本、三冊「登校拒否と家族療法」、「非行と家族療法」、「父親と家族療法」の刊行だった。



児童相談所問題研究セミナー

現在、児童問題研究セミナーと名前が変わって、四十年も継続開催されている業界研究会がある。一年に一度、全国大会が開かれ、翌年にはその報告集が刊行される。地道に継続して現在に至る、歴史ある官製ではない研究会である。



このセミナーの報告集を私も京都府で開催を担当した時、翌年に製作した。しかしこの作業はなかなか面倒なものだった。原稿が集まらない、校正に時間を取られる。

そこそこの大部になるので印刷代も高くなり、販売価格は一冊1500円とか2000円近くなる。それでも全部売れなければ赤字になる。そして実際は在庫がどっさり残る。事務局が保管しておくことさえ負担な印刷物は、バックナンバーが細々売れるのを待つことになる。

ある大会ではこの印刷費を、大会実行委員のSさんが、数十万円も引き受けた。全く不合理な報告集の製作、販売状況が繰り返されていた。

大会そのものは民主的な運営で、関係者の志を糧に継続開催されてきたものだった。しかし、報告集に関するこんな弱点が、開催担当する有志の気持ちを、少々引かせていた。

その後、この報告集は養護問題研究会（養問研）と合同で、明石書店から「日本の養護問題」のタイトルの季刊誌になった。

「児相とその近接領域における 家族療法の実際」

家族療法に熱中していた頃、全国の児童相談所でも、もっと家族を扱える人が多くなればいいのにと思っていた。そんな志を同じくする広島岡田隆介さんと二人で発起人になって家族療法の勉強会を開催した。この勉強会の大会冊子と大会後の報告集のことを書く。

全国から集まって、お互いに実践を報告するそのレジュメ集を考えると、すぐに学会で事前に送られてくる分厚い冊子が思い浮かぶ。見るからに金と手間がかかっていそう。

だからそうではないモノの製作を思案した。

分担印刷

そして採用したのが、各発表者に自分の所で完成させたレジュメを、参加者数分印刷して事務局に送ってもらうことだった。

200人の参加予定になったら、発表者の所で、頁ナンバーの所には京都1、京都2・・・のようにナンバリングして、200枚ずつコピーす

る。それを宅配分で事務局に送ってもらう。締め切りに集まったものを、製本だけの作業として業者に依頼した。



校正や編集が不要な分、時間短縮、労力軽減で発表冊子は完成した。

大会報告集も同じ事で、終了後、速やかに原稿締め切りを告知し、忘却しないうちに同じ要領で製作、発送を依頼した。そして届いたモノ製本して、速やかに大会報告集として全国の参加していない児童相談所も含めて送付した。

全く合理的な方法だと思うし、きちんと作成者に責任を持って貰っている。作家もどきに、いつまでも原稿の届かない人のモノを待ったり、督促するようなバカなことはしない。

報告集を出す意味の一つに、出席したいと思いつつながら、様々な事情で参加できなかった人に、当日の様子を伝えることがあった。参加した者だけで仲間になりたくなかった。そして来年は是非、来てもらいたいと思っていた。

だから、たいてい一年足らずかかって発行されると皆が思っていたことに挑戦したのだ。

誰にも簡単に、気の重い長期間の負担を抱えずとも、報告集の製作が可能になった。

しかしこの方法を次に引き継いだ人達がみな踏襲したかというところ、そうではない。様々な工夫もされていったが、昔の負担の大きい製作過程がイメージから離れきれず、結局、事後報告集は製作しないのが、一番楽だという結果になった。

対人援助学マガジン

2009年秋、立命館大学応用人間科学研究科が中心になって、対人援助学会が創設された。学会そのもののデザインは、それほど斬新でも革新的でもない。まだまだ新設の弱小学会として歩み始めたばかりだ。現在、会員二百人余り。年一度の大会を三年連続、立命館大学で行い、4回目は神奈川県立保健福祉大学で開催された。

学会誌編集長の意向でWEB発行が決定され、査読のフィードバックもWEB上で行うことになっている。そして、読者は学会員だけに限定されないことになった。

だから余計に、当初NLは会員向けに、印刷物として発行することがイメージにあった。そうでないと、会費を支払っている会員のメリットが余りにも少ないことになる。

しかし発足早々の弱小学会にとって、NL一枚だろうと、予算問題はクリアしなければならなかった。印刷費、郵送費、そしてその手間を分担する事務局費用など、何も無いところから始めるのである。

そこで浮かんだアイデアが、NLもWEB版にし、閲覧フリーにすることだった。編集長(私は発足時、学会長でもあった)としては、印刷、発送の手間と経費から解放されて気楽になった。そして、更なる発展意欲が湧いた。

WEB版にするなら、ボリュームは基本的に自由である。執筆者には思う存分書いてもらえばよい。執筆してくれる人があるなら、ページ数にこだわることはない。経費を喰わないのなら、出したい方式で発行できる。

その結果、急遽、NLではなくマガジンとして発行することに決めた。さらに、内容の薄い短文エッセイを並べるのではなく、全記事を連載にすることにした。

こうすることで編集者は、毎回執筆依頼に苦勞するパターンから解放された。この点も、大きな新たな一歩である。執筆依頼、そしてなかなか届かない原稿の督促が、NL編集のストレスなのだから。

そこで、連載を承諾してくれる執筆者を募って、基本的に全て長期連載にした。その結果、季刊発行で現在第26号。創刊号70頁からスタ

ートした「対人援助学マガジン」は、現在250頁余、連載執筆者40名の拡大ニュースレターとして継続発刊中である。

出版

専門書籍の販売不振。雑誌の休刊など、出版業界全般の不況に煽られて、連動しなくても良いところまでが沈滞する。

数多くの学会事務を代行していた会社の倒産で、学会の運営資金に多額の被害が出たのも数年前のことである。

そういう既存システムに組み込まれたアカデミズムの枠組みの閉塞にも、一石を投じる変化を処方できているのではないかと思う。コストや人的負担をかけ過ぎなくても、従来とは別のルートで、時代の資料として、現場からの記述をこの世界に蓄積できる。新しいインフラとの融合は、このように再構築されてゆく。

ここでの次の一歩

縷々述べてきたミニコミ刊行話から継続する「次の一歩」は、インフラの進化との連動である。

もうガリ版印刷こそ姿は消していたが、大枚かけたたいそうな印刷物、青焼きコピー、ゼロックス(と誰もが呼んだコピー)の時代、カラーコピー、そしてPCプリンターの印刷から、Webへのアップと、技術革新によって出来ることは大きく変化していった。

今、この形のマガジンが出せているのも、現在の到達技術との連動である。今後も技術は、更に変化してゆくだろう。

そして、ここが勘所だとも思うのだが、簡単には進歩しないコンテンツへの強力な推進役に、技術の進化が挙げられる。

私達の意見はしばしば、自分の馴染みの時代の技術に支えられることになる。そして、その技術革新によって、置き去りにされることにもなる。それを一概に駄目だとは言えないが、変化に対応するのを、いきなり内容ではなく道具的变化に寄り添ってみる所から始めるのは妥当性のあることだと思う。